

学生はボランティア活動でどのような経験をしているのか (2) —ボランティア経験で育成される教員の資質能力に着目して—

What kind of experience do students have in volunteering? (2)
Focus on improvement teacher qualifications and abilities
in volunteering experience

生 田 淳 一 谷 口 慎 二 川 上 良 治

Junichi IKUTA
教育心理研究ユニット

Shinji TANIGUCHI

Yoshiharu KAWAKAMI

福岡教育大学

ボランティア・コーディネーター

大 門 眞 日 高 和 美

Makoto OOKADO

Kazumi HIDAKA

福岡教育大学

学校教育研究ユニット

ボランティア・コーディネーター

(令和4年9月30日受付, 令和4年12月20日受理)

要 約

大学生(142名)を対象に, ボランティア経験についての記述をデータとしてKH Coder ver.3を用いたテキストマイニングを実施し, 学生のボランティア経験の特徴について分析するとともに, 具体的な記述を取り上げボランティアの経験の特徴について検討した。その結果, ボランティア歴(量・質)のレベルによって記述に違いがみられることが分かった。ボランティア・コーディネーターの支援のもと活動が充実することでボランティア経験の質が高まり, 教師としての実践力や意欲を高まるといった成果が確認された。

1 課題設定

教員養成において, 「体験活動やボランティア活動, インターンシップ等の充実」は重要な課題の一つと認識されており, 福岡教育大学においても学生ボランティア活動の支援は, 教職キャリア形成を促す取り組みとして全学的に展開されている(生田・谷口・松山・藤原, 2021)。

では, そのようなボランティア活動を推進・支援する中で, 学生はどのような経験をしているのか。生田・谷口・松山・藤原(2021)は, 学生のボランティア経験についての記述をデータとしたテキストマイニングを行い, 具体的には, 学生は

ボランティアの経験は, 「ボランティア経験のよさ」「コミュニケーションの大切さ」「一人一人への対応」「ボランティア活動の楽しさ」「指導の難しさ」「小学校の学級の様子」という8つに分類されることを確認した。しかしながら, 対象がボランティア導入期(学部1・2年生であったことから, 4年間通してどのような経験を積み重ねているのかについては検討できていない。

一方, 日高・生田・谷口・川上・大門(2022)では, 在学時にボランティア経験が豊富であった教員初任期の卒業生を対象にインタビュー調査を行い, 教員育成指標の視点から調査結果を分析

し、第一に、在学時のボランティア経験は、様々な場面において入職後の職務遂行（特に、①学習指導と評価の力、②生徒指導と集団作りの力、③教員としての素養（教員公務員に求められる基礎的な能力、使命と責任）などに生かされていること、第二に、理論と実践の往還しながら養成期を過ごすこと、さらには、ボランティア・コーディネーターに相談しながら、適切な支援を受けたことで課題や困難を乗り越えるといったボランティア活動を一層推進していくためのサポート体制の充実が重要となることを指摘している。しかしながら、ボランティア経験が豊富さについて、その内容については言及されていない。つまり、在学期間における活動の積み重ねによる経験の質の変化について検討されていない。

本研究では、今後の教育活動、サポート体制の見直し・改善につなげるべく、在学期間における活動時間や内容によって、その経験の特徴に違いがあるのか検討する。学生がどのような経験をしているのか、については、生田・谷口・松山・藤原（2021）と同様に、学生の記述をテキストマイニングにより分析し、その内容について検討する。また、具体的な記述についても典型的なものを紹介する。さらに、現状の学生ボランティア支援の課題について述べる。

2 学生のボランティア経験についての記述のテキストマイニングによる分析

2.1 調査方法

福岡教育大学のボランティア活動認定システムVSSに認定申請した者（142名）が提出した申請書類に記載したボランティア経験から学んだことについての自由記述を対象に、KH Coder ver.3を用いてテキストマイニングを実施した。

2.2 分析結果

2.2.1 抽出語の出現回数

すべての品詞を採用した場合の総抽出語数は、延べ数 28,478、使用数 10,987 であった。なお、分析に際しては、複合語を強制的に抽出した。抽出には、TermExtract を用い、抽出された複合語のうち使用頻度が高いものを中心にリストを作成した。参考として、頻出語 150 語を資料の表 1 に示す。

2.2.2 学生のボランティア歴（認定レベル）との共起ネットワーク

経験の量と質について考慮するために認定レベ

表 1 資料

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
ボランティア	313	取り組む	21
子ども	244	生活	21
活動	206	接す	21
思う	35	中学生	21
自分	27	分かる	21
感じる	117	補助	21
参加	114	方々	21
学ぶ	110	様子	21
経験	98	頑張る	20
先生	97	今後	20
学校	90	将来	20
考える	87	続ける	20
支援	82	クラス	19
小学校	78	難しい	19
関わる	75	課題	18
学習	72	言葉	18
子供	68	仕方	18
地域	68	主	18
児童	66	前	18
様々	66	他	18
行う	65	サポート	17
成長	60	違う	17
教育	56	学級	17
指導	54	必要	17
授業	53	強い	16
見る	51	食堂	16
教師	46	家庭	15
教員	44	少し	15
人	41	職員	15
大切	40	身	15
行く	38	生かす	15
現場	37	コロナ	14
今	37	関係	14
子	37	教室	14
実際	36	交流	14
大学	36	大変	14
自身	35	それぞれ	13
生徒	35	工夫	13
良い	35	出す	13
企画	34	大学生	13
関わり	33	同士	13
時間	33	日々	13
多い	33	不安	13
体験	33	本当に	13
学生	32	話す	13
知る	32	さまざま	12
多く	31	イベント	12
たくさん	30	サポーター	12
運営	30	意見	12
楽しい	30	影響	12
一緒	29	言う	12
出来る	29	初めて	12
幼稚園	29	場面	12
積極	28	特別	12
教える	27	年	12
実感	27	福岡	12
学年	25	目指す	12
持つ	25	理解	12
声	25	力	12
相談	25	キャンプ	11
対応	25	コミュニケーション	11
学び	24	気持ち	11
特に	24	継続	11
勉強	24	見つける	11
機会	23	高校生	11
貴重	23	今回	11
行動	23	作る	11
得る	23	視点	11
聞く	23	宗像	11
活かす	22	状況	11
実習	22	入る	11
中学校	22	班	11
嬉しい	21	遊ぶ	11
仕事	21	話	11
姿	21	ICT	10

ルの水準による違いについて検討する。ここでの認定レベルとは、過年度にわたって累計した活動延べ時間とその内容に基づいて行う評価基準を指す。本学では、ボランティア活動に対する学生の自己評価や受け入れ先（学校）の他者評価をもとに、学生自らがボランティア活動を通して身につけた資質能力を把握し、自分の成長を意識し、これから先、さらに、自らを高めるため、めざす目標となる「学生ボランティア活動認定システム」を導入している。認定レベルは、サポーター（ボランティア活動延べ時間 100 時間。学校や地域社会のボランティア活動に主体的に参加することができる）、チーフ（ボランティア活動延べ時間 200 時間。学校地域社会のボランティア活動のよさや課題を理解しようとするレベル）リーダー（ボランティア活動延べ時間 300 時間。学校や地域社会、大学のボランティア活動の運営や企画に

参加・協力のできる）の3つである（日高・生田・谷口・川上・大門，2022）。この3つのレベルは、ボランティア歴の量・質の違いを反映しており、リーダーは、最も多くの時間の活動が求められるとともに、活動への参画（運営や企画）という高いレベルの活動が求められる。

各認定レベルの対象者は、それぞれサポーター（88 名）チーフ（35 名）リーダー（19 名）であった。認定レベル（サポーター、チーフ、リーダー）と抽出語との関連性について分析を行った結果を図 1 に示した。分析に際しては、分析に利用する語の品詞を、名詞、サ変名詞、形容動詞、動詞の 4 つに絞り、上位 50 語のみ出力するように設定した。

リーダー、チーフ、サポーターに共通する抽出語は、「子ども」「感じる」「思う」「経験」「考える」の 5 語であり、子どものいる、子どもと触れ合うことのできるフィールドでの活動を体験し、

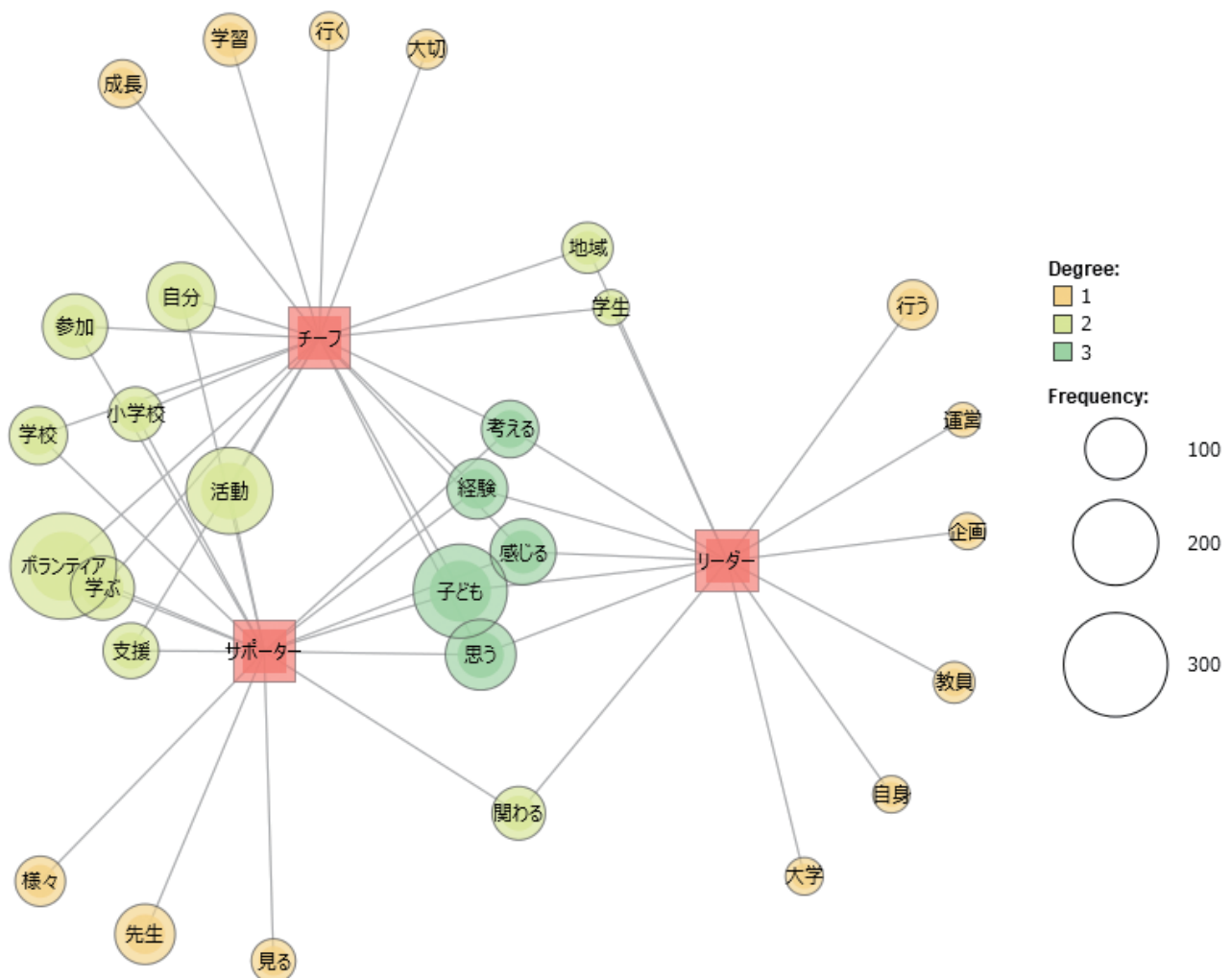


図 1 認定レベル（ボランティア歴）と抽出後の共起ネットワーク図

その中で思考（考え、感じ、思っている）するという経験は共通していることがうかがえる。

一方、各レベルで独自に抽出される語に着目すると、リーダーでは「行く」「企画」「運営」「教員」「自身」「大学」の6語、チーフでは、「学習」「成長」「行く」「大切」の4語、サポーターでは、「先生」「見る」「様々」の3語が抽出されており、それぞれの経験の特徴を示している。特に動詞に着目すると、サポーターの「見る」に始まり、チーフの「行く」、リーダーの「行う」というように周辺参加から活動の主体となり、より主体的に参画する主体となる変化が読み取れる。また、サポーターの「先生」という表現からリーダーの「教員」という表現の変化にも着目できる。つまり、「先生」という仕事から、「教員」としての職業に視点が移っている。リーダーでは、自身の教員としての将来のために、大学の授業を理解する際にもボランティア経験とつながりながら考えている報告が多数みられる。リーダーのレベルになると、理論と実践の往還を自身で行い、自身の教員としての未来像につなげることができつつあることが読み取れる。

チーフ、サポーターに共通する抽出語は、「ボランティア」「活動」「参加」「学ぶ」「支援」「小学校」「自分」「学校」の8語であり、学校での活動の中で、学生自身が参加しながら学んでいる様子がうかがえる。なお、この「学ぶ」は学生自身の学びを指しているのに対して、チーフとつながりのある「学習」は児童・生徒の学習をさしており質が異なる。

リーダー、サポーターに共通する抽出語は「関わる」の1語であるが、サポーターの「関わる」は子どもとの直接的な関わりを指しているのに対して、リーダーの「関わる」は、活動を支える様々な他者（学校・地域など）との関わりを指しており、リーダーではより主体的に企画・運営に参画している様子がうかがえ、活動への参加のあり方にちがいがあることがわかる。

リーダー、チーフに共通する抽出語は「地域」「学生」の1語であるが、学校にとどまらず、様々な他者（ここでは地域、他の学生）から学びを得ている様子がわかる。

このようにサポーター、チーフ、リーダーとレベルが段階的に変化するのに伴って、経験の質も変化していることがわかる。リーダーはより実践的な主体としての活動を経験しており、教員としての資質能力の向上につながる可能性は高いと考える。

3 学生のボランティア経験についての記述例

テキストマイニングによる分析は、主観的な解釈に陥りがちな自由記述の分析に際して、定量的に分析を行うことができ全体傾向を把握するうえで優れている。しかし、その含意を失う点はあるので、文脈に立ち返り確認する作業も必要である（樋口, 2014）。その点を補うために、ここでは分析に用いた自由記述のうち、特徴的なものについて抽出して報告する。

3.1 教師としての実践力が身に付くだけでなく教師としての魅力を発見している報告

様々なボランティア活動を通して、児童との接し方やより良い声かけ、円滑な授業づくりなど、多くのことを学ぶことができた。先生方の授業を通して、体験的な活動を多く取り入れており、児童たちもとても興味を持って授業に参加することができていると感じた。また、授業だけでなく、体力テストや交通安全教室などのサポートにも参加させて頂き、児童一人ひとりが実際に活動を行う授業では、明確な指示とクラス全体でのまとまりがとても重要となってくるなど感じた。また、サポートが必要な児童や授業についていけない児童へのサポートでは、どのように声かけや関わりを行うと、意欲を引き出すことができるかなど試行錯誤してかかわることができた。複数の小学校にボランティアに行かせていただき、それぞれの小学校ならではの地域との関わりや、小規模学校と大規模学校のそれぞれの良さなども感じることもできた。そして、小学校以外にも、家庭に問題を抱える子どもや食事を十分に取れていない子どもたちを支える子ども食堂に多く参加した。子ども食堂では、様々な問題を抱える子どもたちから話を聞いたり、勉強のサポートを行ったりした。食を通して子どもたちの家庭の事情を知ることができたり、健康面を確認することができたりするので、食での関わりはとても重要なものであるなど感じた。（学部3年）※下線は筆者らによる。

3.2 教育実習とボランティア活動をつなぐ助言が生き、実際活動で教師としての実践力を発見し意欲的に参加している報告

今回のボランティア活動では、運動会練習と授業の補助の両方に関わることができました。授業の補助では、その1週間前に経験した体験実習での学びを生かすことができたと思います。机間指導では、声をかけるタイミングや答えを導きだせるような発問や指示の出し方を意識しました。答

えが出せて嬉しそうにする姿が印象的でした。また、2回のクラブ活動にもタイミング良く参加させていただくことができました。私にとって、初めての高学年の児童と接する機会となりました。体を一緒に動かすことで、自然とコミュニケーションがとれたと思います。「先生！」と元気よく駆け寄ってくる姿はどの学年も変わらず嬉しく感じました。運動会練習では、教科学習とはまた違った青をして練習に取り組む姿を見ることができました。また、教師として子供たちを安全に指導するための配慮等もまなぶことができました。(学部1年) ※下線は筆者らによる。

本実習前に現場の小学校を見させて頂きたくて申し込んだボランティアでした。実習の際配属された学年とは異なる学年での学習指導補助がメインでしたが、先生方の子供たちへの向き合い方、大切にされていること、徹底されていること、など様々な面において新しい発見があり、大変勉強になりました。校長先生、教頭先生、指導主事の先生、学級を担任されている先生、補助として入られる先生と、様々な先生方にお話が聞かせて頂く機会がありました。それぞれの信念を持って教師という仕事をされていて、改めて教師の偉大さ、尊さを実感しました。また、担任による学級づくりの重要性や子供たちに対してもつ愛情の深さを感じました。思い出深い母校の小学校で、たくさんの子供たちと懐かしい先生との再会があり、とても楽しく実りのあるボランティア活動をさせていただきました。本実習がんばります。ありがとうございました。(学部3年) ※下線は筆者らによる。

3.3 報告から読み取れる学び

報告される学生の記述(経験)からは、次のように様々な文脈で一人一人が具体的かつ実践的な多様な「学び」を得ていることを読み取ることができる。以下、列挙する。

- 言葉で説明することの難しさ
- 発達段階に応じた接し方
- 算数科におけるコース別学習では、同コースであっても理解度に差があることに気付く
- 意欲付けのための声掛けや手立ての工夫は、児童の実態を把握した上でできること
- 数概念の理解は、系統性が大切であること、困り感のある児童はどの段階で躓いているのかを前もって把握することが大切

- 情報担当と担任のTT学習活動場面ではチーム学校の大切さを学んだ
- 楽しく学ぶ、楽しく発見できる手立ての工夫がすごい
- 学校体育における安全面への配慮とチームワークという心理面への配慮が参考になった
- 特別支援教育における個に応じた配慮のすばらしさが安心して伸びるチャンス引き出すということが分かった
- 音楽の歌唱指導では、モデル演示の大切さを学んだ
- 体育の表現活動では、各グループの活動を平等に観察してタブレットで動きを具体的に支援したり実際に担任と表現したりしながら支援することで意欲が増すことが分かった
- 生活科での昔遊びでは、一人一人に道具が使える環境とベアラー学習の大切が分かった
- 初めてのタブレット端末の学習では、情報担当・担任・補助者のチームワークがオンライン学習へのスムーズな橋渡しになると感じた
- 不審者対応の訓練では、伝え方の工夫が安全行動を生み出すということが分かった

3.4 報告から読み取れる成果と課題

3.4.1 成果

報告を一つ一つ具体的に整理していくと、ボランティア・コーディネーターの支援により教師としての実践力や意欲を高まったケースが少くない。ボランティア・コーディネーターの支援の要点は次のように整理でき、このような支援活動を通して、教師としての実践力や教職への意欲を高めることができると考えられる。

- ①依頼団体に活動募集への創意工夫の呼びかけが重要
 - ・本学の特色を生かした活動の提案を行うことで教師の資質能力が高まる(教育実習とつなぐ・特徴教科を生かす・学校教育課題研究論文とつなぐ等)。
 - ・地域貢献度を高める活動の提案の呼びかけが重要(コミュニティ連絡協議会・子ども食堂や放課後児童クラブ・書道教室・運動クラブ支援・街づくりに関わる企画運営等)
- ②多様なボランティア活動を促すメール支援や対面による活動支援(ボランティア実践入門・フレッシュマンセミナー・学生ボランティア報告会等)

3.4.2 課題

これまでの取組成果を生かしながら、教育に関わる社会情勢の変化に対応して、新たなボランティア活動の開発にも取り組む必要がある。具体的には、不登校支援、特別支援、日本語を母語としない児童生徒支援、金融に関する教育支援・街づくり支援などを挙げることができる。

また、継続的に活動することでサービスラーニングとしての発展性のあるボランティア活動にも着手することが求められる。

4 まとめ

認定レベル（ボランティア歴）の違いによって、経験が異なり、サポーター、チーフ、リーダーとレベルが上がるにつれより実践的な資質能力の獲得につながる経験（たとえば、活動の企画・運営に主体的に参画すること）を得ていることがわかった。また、ボランティア・コーディネーターの支援により、問題解決をしながら活動を展開し、活動が充実することでボランティア経験の質が高まり、教師としての実践力や意欲を高まるといった成果も確認された。ボランティア・コーディネーターとの交流からボランティア経験のふりかえりが充実していくケースが多い。このことから、ボランティア経験が広く豊かな教養の醸成に寄与するには、学生が自分のボランティア経験を言語化し、リフレクションすることを通して、自分の教職キャリアと結びつけることができるよう、語り合う場を提供することが重要である（生田・谷口・松山・藤原，2021）。

今後の教育活動、サポート体制の見直し・改善については、次のような点も検討課題となっている。本学では、平成23年度に「ボランティアサポートシステム（VSS）」を導入し、令和2年にはより利便性の高いシステムに更新を行った。その結果、学生と依頼団体とのマッチングが時間や場所を問わず可能となり、活動後の報告方法も簡

便となり、コメント（学生が報告するふりかえり）の内容は質量ともに充実している。また、報告ミス、例えばボランティアの活動時間が0時間だったり、24時間だったりした場合も、メールのやりとりで修正が可能となっている。このようにVSS上で多くのことができるようになり、学生、依頼団体、コーディネーターが直接対面で関わる機会が激減した。対面の機会はボランティアに関するだけでなく、活動に付随してのエピソードや日々の学生生活、彼らの成長などを垣間見ることができたが、現状ではVSS以外の活動や短期集中型ボランティアの調整、地元でのボランティアやサークル活動への助言などの相談等に限られてきたように思う。学生の成長や活躍は、ボランティア・コーディネーターとしての有用感や達成感に通じるが、直接的なやりとりではなく、学生や依頼団体のコメント、ボランティア報告会での様子や様々なボランティア活動の取材を通して実感することが多くなっており寂寥感是否めない。学生の活動を見守りながら、その支援システムの有効性についても今後検討を進めたい。

引用文献

- 樋口耕一（2014）社会調査のための軽量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版
- 生田淳一・谷口慎二・松山時春・藤原富男（2021）学生はボランティア活動でどのような経験をしているのか—福岡教育大学のボランティア支援の取り組み— 福岡教育大学紀要，第70号，第6分冊，pp.59-65
- 日高和美・生田淳一・谷口慎二・川上良治・大門眞（2022）大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行等に与える影響（1）—初任期教員に焦点をあてて— 福岡教育大学紀要，第71号，第6分冊，pp.35-41